

アルケー

EL ARCHE

ヴェールを脱いだ錬金術

サマエル・アウン・ベオール講演録より

内的な体の創造

内的な体を創造するにはちょっとした技巧が必要である。同時にこれは古代錬金術師たちの「秘中の秘」でもある。この「秘中の秘」とはアルカーノA. Z. F. のことである。「精液をこぼさない、精液の本質（エンス・セミニス）を放出しない性の結びつき」と言うことができる。この方法によって、我々は創造エネルギーを変換することができる。

まず第一に、水銀は精液のメタリックな霊にすぎないということである。錬金術では、精液は未精製の水銀である。この精液を変換することによって、精液のメタリックな霊である水銀は精製されると言われている。

さて水銀には三種類ある。①未精製の水銀、すなわち ^{エクシオヘリ}Hexiohehary、つまり神聖な精液。②精液のメタリックな霊。これはリビドーを変換した結果である。このメタリックな霊とは、背骨の神経経路を通して脳まで上昇する創造エネルギーのことである。③第三番目の水銀は最も洗練されたもので、硫黄と受精した水銀である。錬金術でいう硫黄とは神聖な火のことである。

東洋の秘教家たちの信じるところによれば、水銀のプラス電流とマイナス電流が尾骨付近のトリベニで接触するとき、電気誘導によって第三の力であるクンダリーニーが目覚めると言われている。とぐろを巻いた蛇の火ともつばらと呼ばれるこのクンダリーニーは、行者の体内、尾骨付近で目覚め、成長する。この神聖な火、すなわち硫黄は水銀のメタリックな霊と混ざり、この混合物から硫黄と受精した水銀が生じる。この、水銀と硫黄の混合物は脊髓経路を通して脳まで上昇し、脳の高等センターを目覚めさせる。硫黄と受精した水銀の余剰成分は、本質的存在の高次的顕現体を実際に創造することになる。

硫黄と受精した水銀が、ドレミファソラシの調べと共に我々のサイキス（霊）内で、そして有機体内で結晶化するとき、アストラル体が形成される。それゆえアストラル体とは、硫黄と受精した水銀に過ぎない。ドレミ

ファソラシの第二オクターブによって、硫黄と受精した水銀が結晶化するとき、メンタル体の姿をとる。それゆえメンタル体も、やはりそのように第二オクターブにある硫黄と受精した水銀である。硫黄と受精した水銀がドレミファソラシの調べと共に第三オクターブで結晶化するとき、コーザル体が形成される。

ひとたび肉体、アストラル体、メンタル体、コーザル体が創造されるやいなや、真実の人間が誕生する。すなわち、真正の人間の霊的、精神的原理を持った人間が誕生する。それ以前では、人はインテレクチュアル・アニマル（知的動物）であり、人間ではない。

アルケー

硫黄と受精した水銀である第三番目の水銀は、いちばん精製されていて、最も重要である。なぜならそれは非常に大切なものであり、いわゆるアルケー、ギリシアのアルケー、有名なアルケーを示すものだからである。アルケーであるその第三番目の水銀から、本質的存在の顕現体が誕生する。大宇宙の中にもアルケーを、大宇宙のアルケーを我々は見出すことができる。その大宇宙のアルケーとは星雲であり、そこから諸世界が生じる。星雲とは何か、それは大宇宙のアルケーであり、塩と硫黄と水銀の混合物である。塩とは魂のことである。塩は神聖な精液の中に含まれており、精液の変換とともに昇華される。それゆえに小宇宙のアルケーの中にも塩と硫黄と水銀がある。

〔質問〕 マスター、ここでいう塩とは何ですか？

〔回答〕 塩は性的な分泌液の中に含まれているが、実は塩を昇華する必要がある。精液の変換が実現するとき、塩も変換される。小宇宙のアルケーから本質的存在の高次の顕現体が生まれるが、そこには塩と硫黄と水銀が存在し、大宇宙のアルケーの中にも塩と硫黄と水銀が存在する。

星雲から、大宇宙のアルケーから、そこから宇宙的な単位である諸世界

が出現する。「下にあるものは上にあるものと同じである」。諸世界が出現するためには星雲が必要である。星雲が生じるためには、アルケーが、また塩と硫黄と水銀の混合物であるマテリア・プリマ（第一物質）が必要である。下にある小宇宙においても、塩と硫黄と水銀によって、まず星雲がつくり出されなければならない。天上と同じようにその星雲から、諸世界が、本質的存在の高次の顕現体が生じるのである。神が大宇宙でなされたことを、我々はこの小宇宙で行わなければならない。なぜなら「上にあるがごとく下にもある」からである。このようにして本質的存在の高次の顕現体が誕生することになる。

従って我々の内に、まさしく我々の内にアルケーを創造する必要がある。アルケーとは、塩プラス硫黄プラス水銀である。「上にあるがごとく下にもある」。アルケーを創造することによって、肉体もアストラル体もメンタル体もコーザル体も結晶化することになる。アルケーである第三番目の水銀から太陽体がつくられる。我々はこのことをより深く理解するために、神秘学の光に照らし、錬金術師の視点から研究しているのである。

乾燥水銀と砒素硫黄の除去

高次の体をつくった者は、次により完成したものにななければならない。それらの体を完成するには、複数の「我」以外の何者でもない乾燥水銀を除去することが必要である。もし「我」を除去しないのであれば、顕現体は完成しない。「我」を除去しないのであれば、未完成の体を本質的存在の様々な部分で覆うことはできない。覆うためには、完成して純金の乗り物に変換する必要がある。しかし乾燥水銀と砒素硫黄が除去されない限り、それらの乗り物を純金の道具に変換することはできない。乾燥水銀とは何なのか。それは「我」である。砒素硫黄とは何か。そう、これが「人間の原子地獄」の、肉欲の動物的な火である。その火は、忌まわしいクンダルティグアドル器官に相当する。

錬金術のアルケーによって創造された、本質的存在の高次の顕現体を極上の純金の乗り物に変換するためには、乾燥水銀と砒素硫黄を除去する必

要がある。それらの純金の乗り物は、本質的存在の様々な部分で覆うことができる。そして、それらすべての乗り物は干渉せずに相互に浸透し合い、我々の王、インティモ・クリストの衣として役立つようになるのである。このような衣があるとき、クリストは墓から身を起こす。クリストはその衣をまとい、意識を通してここに顕現し、苦悩する人類のために働く。このようにして、主、コスミック・クリスト、すなわち錬金術の内なるマグネシウムが出現する。

賢者の石とは何か。それは、黄金の体をまとったインティモ・クリストのことである。いくつもの体からなっている黄金の衣は、「ト・ソマ・エリアコン」、太陽人間の黄金の体である。賢者の石を手にするとき、自然全体を支配する完全な力を獲得する。自然は彼に従う^{エリキサ}べきを知っており、彼は不老不死の靈薬を持ち、肉体を永久に保持できる。それゆえ、これが道であり、道は種子の中にあり、しかもそこにしかない。

人間の有機体内では興味深いことが起きる。本質的存在の高次的顕現体は硫黄と受精した水銀に他ならないが、受精するとき、水銀からなるこれらの体に黄金が出現しなければならない。しかし誰が金の原子を水銀に固定することができるのだろうか。それはある仕掛けなしには不可能である。その仕掛けとは、有名なアンチモン、錬金術のアンチモンに他ならない。実際、アンチモンは未知の化学金属ではなく、錬金術においては本質的存在の一部である。本質的存在のその部分は、水銀の体に金の原子を固定するべきを知っている。このようにして、水銀のそれらの体は、極上の純金の体に変換していく。

純金の体を持つとき、黄金の剣を授かる。今や極上の純金の剣を持った一位（一人）の大天使である。激しい炎を吐きながら他を威嚇して反撃にでる剣。大天使の剣。

それゆえ水銀に金の原子を固定することは、何と価値あることであろうか。そして、これはすべての乾燥水銀と砒素硫黄を除去した条件のもとで達成できる。もし除去できないなら、体を完成して極上の黄金にすることは全く不可能である。従って大作業（グラン・オブラ）の全秘密は、水銀

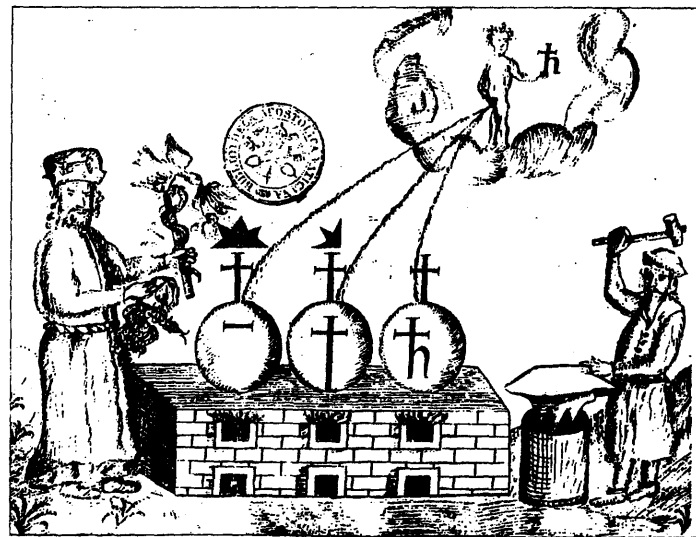
をつくり、ついにはアルケー、内部に特殊な星雲を創造する方法を知ることにある。内的な体は、その星雲から誕生しなければならない。

三段階の純化

〔質問〕マスター、鉄と火による三段階の^か煅焼とは何ですか？

（* 煅焼^か・・・物質を強熱して揮発物を除く操作、焼いて灰にすること）

〔回答〕鉄と火による三段階の煅焼は、第一の山、第二の山、および第三の山の一部に対応する。水銀の三段階の煅焼とは、鉄と火による三段階の純化（浄化）のことである。三段階の純化によって、鉄と火による三段階の浄化によって、我々はクリストの復活に至る。これは、十字架に打たれた三本の釘で表される。三本の釘は、鉄と火による三段階の純化を象徴する。従って三段階の純化があり、水銀の三段階の煅焼がある。



三段階の純化

近代化学の成立前、錬金術が盛んに研究されたが、その真理を隠すため多義的なイメージで表現された。上図はその一つで、隠された火による三重の昇華作用が、物質をその純粋な根源状態に還元することを示している。

（「真理の書」17世紀 ヴァチカン使徒図書館蔵）

第一段階の煅焼は、イニシエーション（奥義参入）の山に対応する。第二段階の煅焼は、復活の山に対応する。第三段階の煅焼は、大作業の最後の八年間に対応する。従って、大作業のこの全ワークは水銀の準備のためにある。賢者たちは語る。「われらに水銀を与えよ。さすれば万事を成し遂げん」。手短に言えば、大作業のワークはその言葉に尽きる。

二重の重心

さて、どのようにして復活に至るのか。まず「人間」になり、それから超人の王国に参入すればよい。人間に関してアナワク写本はこう語っている。「神々は材木から人間どもをつくり、それから人間どもを神性と融合させた。すべての人間が神性と融合できたわけではない」。神性と融合した人間とは、明らかに超人のことである。イニシエイトの大部分は「人間」になれるが、超人の位には達しない。真実の人間になるためには体を創造しなければならないが、体を創造できる者の多くは、当然、精神的、霊的な原理を受け取る。それはすなわち、正真正銘の人間に、真正の人間になったことを意味する。しかし、彼らはまだ乾燥水銀も砒素硫黄も除去してはいない、ということを知る必要がある。それでは何が起こったのか。彼らの体は未完のままで、純金にも変わっていない。体を創造することはできたが、彼らの体を極上の純金に変換できていない。彼らは単にハナスムッセン人間としてとどまる。なぜなら、本当にエゴを除去していないからである。これは失敗の事例である。

ハナスムッセンは二重の重心を持っている。いくつかの体をまとった内なる奥深い人間、本質的存在である意識のときと、もう一つはエゴを形成している、いろいろな「我」の中にびん詰された意識のときがある。彼は同時に白魔術師にも黒魔術師にもなる。二重の重心を持ったハナスムッセンは、宇宙の母の流産であり、失敗作である。アンドラメレックは、二重の重心を持ったハナスムッセンの一例である。アンドラメレックを高次元の世界で招喚すると、座天使であることがわかる。しかし別の招喚では、むしろ大昔からいる黒魔術師アンドラメレックが現れる。彼は二重の重心を持った、ハナスムッセンである。

海の星、ステラ・マリス

ハナスムッセンは大作業の失敗、宇宙の母の流産である。宇宙の母は、神聖な精液のアストラルの記号であり、海底から、精液のメタリックなカオス（混沌）の中から、忽然と生じる輝く星である。ステラ・マリス（ラテン語で「海の星」の意）は水銀の火の部分であり、大作業において我々を案内し、導いてくれる。大作業の全ワークを助けるのは、ステラ・マリスである。ステラ・マリスは海の聖母、人を宿す内なる海の、精液の母である。まさしくその海から、精液の火の部分である高潔な星が生じる。ステラ・マリスは魔術師全員を導き、大作業を指導する象徴的な星である。そして神聖な精液のアストラルの記号、聖なる母クンドリー・シャクティである。ステラ・マリスと共に大作業は実現するが、もし乾燥水銀も砒素硫黄も除去しないのなら、神性との融合は果たせない。死がないのなら、流産に、失敗に終わる。それゆえに、ワークを正しく行うべきである。

ステラ・マリスの援助によって乾燥水銀と砒素硫黄を除去するならば、アンチモンが金の原子を水銀に固定する準備が整う。実際に除去できたなら、アンチモンが働いて金が固定される。

〔質問〕 マスター、無意識のうちに第一イニシエーションを通過するというのは本当なのですか？

〔回答〕 それは小密儀の第一イニシエーションであり、試補（見習い）の道である。我々にとって重要なのは、大密儀の偉大なイニシエーション、大作業のワークである。

大作業の神秘を理解するには、ドヌム・デイ（ラテン語）、すなわち「神の贈り物」を授かる必要がある。もし大作業の科学への参入を可能とする「神の贈り物」を授かっていないのなら、たとえそれを研究したとしても理解することはできないだろう。なぜなら、それはインテレクトではなく意識にストレートに到達するからである。大作業の科学はすべて意識に至り、意識の機能に属する。錬金術の大作業はみな、このように言うことができる。

黒、白、黄、赤 (紫)

〔質問〕 マスター・サマエル、錬金術のテキストには白色と赤色が頻出しますが、それらは何ですか？

〔回答〕 それらの色は、“るつぼ”の中で体を純化しているときに水銀の呈する色である。その“るつぼ”とは、性的な“るつぼ”のことである。従って最初は黒色を呈し、それから白色に、次に黄色へと進み、最後は赤色で終わる。これは黒人と白人と黄色人種の東方からの三博士（マタイ福音書2:1~12）で象徴される。赤色が欠けているが、彼ら三博士が上昇するためには赤色が必要だということである。彼らを導く星は、まさしくステラ・マリスである。ステラ・マリスはワークにおいて我々を導いてくれる。彼女こそが全作業を行うのである。

明言すれば、もしアストラル体を純金の乗り物に変換したければ、乾燥水銀の除去に専念する必要があるということである。もちろん、そのときアストラル界に沈んでいるすべての「我」が、おそろしい、身の毛もよだつ、圧倒的な力をもって現れる。それらの「我」は腐敗しながら処理されていくが、たとえ悪魔たちが激しく攻撃してきても、崩壊させなければならない。そのような状況になったとき、その人は「すでに土星の王国に入り、そこで土星に対応する黒い火のワークを開始した」ことになるという。これらすべての要素が崩壊・破壊し始めたとき、アストラル体の水銀が白色をおび始める。しかしそれらの望ましくない要素の大部分が何とか破壊されたとしても、アストラル体の表面だけが白くなるにすぎない。それからもアストラル体に対するワークを続け、乾燥水銀を除去しつづかなければならない。このようにして黄色を、偉大なる密儀の黄色を持つことになる。ワークを続けていくと、アストラル体に望ましくない要素が完全になくなるときがやってくる。そのとき、アストラル体全体が純化され、光輝くようになる。つまりアンチモンが金の原子をその水銀に固定し、アストラル体が純金になるのである。アストラル体が純金になったとき、聖なる母クンドリーニはそれを飲み込み、紫を、紫色のチュニックを、博士たちの紫を受け取る。それゆえに色は、黒、白、黄、そして赤に相当する紫なのである。メンタル体もコーザル体も同じ過程を通る。



四色の服

おのれ自らの尾を喰うウロボロス（宇宙蛇）の上に立つ錬金術師は、四色の服（下部、向かって左から反時計回りに、黒、白、黄、赤色）を着ている。手に持つ杯の中のヒドラ（多頭蛇）は錬金薬液（エリキサ）を象徴し、三頭に分かれた蛇は作業の成功が三重の溶解に基づくことを示している。

（『哲学の薔薇園』16世紀 ヴァディアアーナ市立図書館蔵）

内なるクリスト

すべての体を純金の乗り物に変換すると、それらの体は干渉せずに相互に浸透しあい、有名な「ト・ソマ・エリアコン」、太陽人間の黄金の体を形成する。しかし、まだすべての体を変換していない人間のハートには、クリストの復活はあり得ないだろう。

「ト・ソマ・エリアコン」は主の、内なるクリストの衣として役立つ。内なるクリストはクリスタルの墓から身を起こし、この世に戻って顕現する。黄金体に包まれ、マハートマ（大聖）として物質界に表現される。なぜ主はこの世に降臨するのか。それは人類のために働くためである。それが目的なのである。お気づきのように、我々は三博士と星の意味をもう理解しつつある。

幼な子に関して言えば、その幼な子とはインティモ・クリストのことである。三博士の礼拝する幼な子、このワークのすべてを成し遂げなければならぬインティモ・クリストのことである。錬金術のこの過程の間、深遠な内なる主はすさまじい働きをする。実際、今や内なるクリストは大作業の指導者であり、ステラ・マリス自身はその指導のもとで働く。内なるクリストは作業の長である。

それゆえ深遠な内なる主がクリスタルの墓の中で大作業をすべて完了したあかつきには、幼な子として人間のハートに生まれる。内なるクリストは秘教的ワークの間、成長し、己れ自身の中でコスミック・ドラマを生きなければならない。そして我々のすべての霊的、意志的、感情的プロセスを受け持つ。一語で言えば、クリストは人間の中の人間になり、すべての誘惑、肉体に対しての誘惑を受ける。クリストは誘惑を克服し、勝利を収めなければならない。クリストのすべての乗り物はもはや純金であり、それらの体をまとめて、まさに宇宙の中で勝利し復活したアデプトとして肉体の世界で生きることができる。従って次のことを覚えておきなさい。深遠な内なる主インティモ・クリストは神のすべての威厳を備えており、世界に様々な反応を引き起こす。なぜなら我々の真実の救世主だからである。

以上が、ユニヴァーサル・ノスティシズム（普遍的ノース主義）の説く「救われるべき救世主」(Salvator Salvandus) の骨子である。彼はそのアデプトの救世主である。内なる救世主であり、実験室内の大作業の長、錬金術の内なるマグネシウムである。そして黄金体をまとう彼は、賢者の石、貴い宝石、ルビーなのである。

その石を所有する者は、鉛を黄金に変換する力、“投射の粉末”を持っている。その石は展延性に富み、弾力性がある、完全である。それでももちろん火中に投じて、脂身のようになくなることはない。火にかけたフライパンに脂身を入れてもなくならないように、賢者の石を火中に投じたとしても同様である。しかし、インティモ・クリストである、石のメタリックな魂は失われるかもしれない。そのメタリックな魂はなくなるかもしれない。いつなくなるのかというと、金属が溶けるときである。いつ金属が溶けるのか。それはヘルメスの杯がこぼれるときである。金の金属反応でメタリックな魂は溶けてしまい、疑う余地なく、内なるマグネシウムは消え去ってしまう。賢者の石は失われ、水に溶けてしまったことがそこでわかる。大作業以外の他の言葉で表せば、「菩薩（ボディサットバ）がそのとき転落する」と言うことができる。また錬金術では、「石を水の中に投げ捨てる」、「土曜日に石が水に溶ける」と明確に述べている。土曜日とは土星、すなわち死の王国を意味しているということを理解しなさい。自分の石を水に溶かす者は、こうしてそれを失うのである。

創世記、黙示録、福音書

創世記全体が大作業に関連している。創世記の一日目は、奈落でのワークおよび黙示録の第一の封印に対応する。創世記の二日目は水とのワーク、生命体に対応している。創世記の三日目はアストラル体に対応し、創世記の四日目はメンタル体に、五日目はコーザル体に、六日目は黙示録の第六の封印に、ブッディ体または直観体に対応する。それから第七の封印、創造の七日目は安息日である。ワークは六日間または六つの期間で行われ、七日目は安息日に当てられ、八日目には主の復活が到来する。それゆえ創世記と黙示録は補完し合っている。

大作業は総括すると八年で実現する。大作業の高等なワークは八年を要するということであるが、ワークとその準備の期間はそれよりずっと長い。しかし大作業が完成する最後の総括、最後の期間は八年である。ヨブの八年、すばらしい八年である。

こうして作業は時の流れの中で実現するが、たった一度の生まれ変わりでも十分に活用すれば、それをすべて実現することができる。

創世記と黙示録は錬金術のテキストである。創世記は、今現在、^{インティモ}内的ワークによって生きるべきものであり、黙示録もまた同じである。黙示録は錬金術の書である。

〔質問〕 マスター・サマエル、黙示録は他国語に翻訳されることによって内容が歪められたのですか？

〔回答〕 黙示録は、誰も手を加えなかった唯一の書である。誰もそれを理解できず、誰も手を加えなかったので、不祥事から逃れることができた。ところで大作業のすべては黙示録の中に収められているが、それは叡智の書であり、その中には自然の諸法則が記されている。さて、各人は自分自身の内なる黙示録を持っている。ペテロの黙示録、ヨハネの黙示録、パウロの黙示録が存在し、また我々一人ひとりの中にも黙示録が存在する。各人は自分自身の黙示録を持ち、その生き方には二通りの道がある。すなわち、大作業を行いながら我々自身の内部でそれを生きる道と、もしくは自然と共に、人類と共に普通にそれを生きる道である。たとえば、今の人類は第六の封印をすでに解き、第七の封印を破るのを確実に待ち構えている。それが解かれるとき、大地震が起こり、究極の大異変が到来して現人類は完全に破滅するだろう。自分自身の内部でそれを生きるのなら、それは凄まじいものであるが、復活したマスターという最高点に到達する。七つの封印は七つの体、すなわち肉体、エーテル体（生命体）、アストラル体、メンタル体、コーザル体、ブッディ体、アートマー体を意味している。

黙示録は内的で奥深く、自分自身の内部で生きるべきものである。

このことは福音書と同じである。クリストの四つの福音書は錬金術的であり、自分自身の内部で生きるべきものである。なぜならクリストは自分自身に内在するからであり、自分自身の内部にクリストを見い出さなければならぬ。クリストは実験室の全ワークの指導者である。

コスミックドラマ

〔質問〕 でも歴史上のイエスは確かに存在したのでしょうか？ マスター。

〔回答〕 内なるイエス・クリストは存在し、また歴史上のクリストも存在した。歴史上のイエス・クリストの功績は、我々一人ひとりに固有のインティモ・イエス・クリストの教義を認識させたことである。それが彼の功績であり、インティモ・クリストの教義を普及したのである。たとえば仏陀の功績はインティモ・ブッダの教義（心理的ワーク、エゴ根絶）を教えたことである。ナザレのイエスは、我々一人ひとりのインティモ・イエス・クリストの教義を明らかにした。そのようなわけで、これがベチュアであり、ベチュアは救世主である。聖なる母クンダリーニは受胎前には、ゴシック様式のすべての修道院の地下室に安置されている黒聖母である。黒聖母にはろうそくの誉れが、緑色のテーブルランプの誉れが、いつの日か緑色のライオン、すなわち火を目覚めさせるという希望の誉れが与えられている。しかしロゴスによってまさに受胎したとき、聖なる母となる。それは両腕に幼な子を抱いた神聖な受胎である。降臨する幼な子は聖なる母の子となり、大作業の行程を始めるために、我々の体内に入る瞬間を待っている。我々一人ひとりの救世主、内なるイエス・クリスト、それはまさに心に留めるべきことである。我々のインティモ・ベチュア、救世主。我々各人は、自分の内なる救世主を見い出さなければならない。

〔質問〕 マスター、イエスはクリストを具現（受肉）したのですか？

〔回答〕 ナザレのイエス、偉大なるカビール（大司祭）のイエス、彼は大作業を行い、大作業の主であるインティモ・イエス・クリストについて語ったのである。コスミック・ドラマとは、我々の内なる主が大作業のワー

クにおいて、今ここで我々自身の内部で生きなければならないものである。例えば、ユダ、ピラト、カヤパの三人の裏切り者がいるが、彼らは三人の悪魔である。ユダは欲望の悪魔であり、各人は自分の内部にそれを宿している。ピラトはマインドの悪魔であり、いつも正当化の理由を捜し、極悪の罪の言い訳を考える。カヤパについては、それは我々一人ひとりにおける悪意の悪魔であり、クリストを引き換えにする、言わば宗教をお金のために売る裏切り者である。カヤパは祭司であるのに、何をしているのか。祭壇を快楽の寝床に変え、女性の信者たちと交わり、祭服を売ったりする。つまるところ、ユダとピラトとカヤパは、インティモ・クリストに背く三人の裏切り者であり、インティモ・クリストを死に追いやる者である。そしてクリストの死を要求する無数の群衆はみな、「十字架につけよ、十字架につけよ、十字架につけよ」と叫ぶ我々の複数の「我」である。そう、我々の深遠な内なる主は、いばらの冠をいただき、むち打たれる。神秘家はみな、それを見ることができる。最後には、磔^{はりつけ}にされ、十字架から降ろされ、墓に安置される。その後、自らの死によって死を克服し、黄金の体をまとって復活する。そしてこの世の特別な体を所有する。そこに賢者の石の神秘がある。賢者の石を持つ者は幸いである。なぜなら彼は復活したマスターだからである。

これが、今ここで我々自身の内部で生きるべき福音書の神秘である。我々の主イエス・クリストの生と受難と死は、人々が信じているような歴史上のものとは厳密な意味で異なる。それは、緊急に現実化されなければならないもの、つまり各人が自分の内部の実験室で実現しなければならないものである。これがクリストについてのありのままの事実である。二千年前に起こった過去のことではなく、今、我々が生きるべきことである。このことすべてを私は生きてきた。そしてその証をあなたに示そう。

証（あかし）

ちょうどこの瞬間に私の深遠な内なる主は聖墓にある。人類のためになすべき大なる仕事を実行するため、私の深遠なる内なる主は1978年に私の中で復活し、私は主の中で復活を遂げるだろう。彼こそがその仕事を行う者であり、取るに足りないわが身は道具に過ぎない。しかし彼自身は完全あり、完全であるがゆえにその仕事を全うする。それゆえに私は確かなことの、生きてきたことの証をする。創世記はノスティックの書である。それはありのままの事実である。

私はクリストをずっと前に具現した。ティフエレット・イニシエーションを受けたとき、クリストは幼な子として私の内に誕生した。それからクリストは成長し、発展し、私自身の内部ですべてのドラマを経験しなければならなかった。従ってこうして話すことができるのは、それを知っているからである。カルバリオ（ゴルゴダの丘）を通り過ぎた後、クリストは今この瞬間に聖墓にいる。ときおり私はそこに行き、墓石に接吻する。クリストが三度目に復活する1978年まで、その復活を心待ちにしながら。そう、三度目と私は言うが、それは三度大作業を行ったからである。過去の「宇宙の昼」、すなわちこの地球連鎖が始まる前の月連鎖（アース・ムー）において大作業を行ったのである。その後、レムリアで、動物的生殖に堕ちた天使たちのあの反乱のときに。明らかにそれはレムリア、すなわちムー大陸においてであった。そのとき、禪定菩薩（ディヤーニ・ボディサットバ）でありながら動物的生殖に堕ちるという過ちを私も犯してしまった。賢者の石を失ったが、同じレムリアでそれをつくり上げた。その後、アジアの中央高原でザノーニ伯爵がしでかしたように、すでに禁じられていたにもかかわらず妻をめとるという過ちを犯したのである。そのとき再び賢者の石を水に捨てた。今、この新しい転生で大作業を行い、三度目の……、まさしく三度目の主の復活を達成しようとしている。従って、すでに三度行ったことになる。そういうわけで経験があり、道を知っている。道を知っているのである……。

フェニックス

私がここで力説したいことは、まさに偉大な真理である。月で、苦心して初めてつくり上げた賢者の石は強力なものであった。二度目につくり上げた賢者の石は、より強力であった。現在、三度目のをつくっているが、得られた経験ゆえに、賢者の石はずっと強力なものになるであろう。そこに我々の理解すべき知的な原則がある。人間は大いに闘って変換し、ついには神との合一を果たす。そこまでは進歩するが、神との合一を達成した後には、神がその人間を通して顕現した後には、それ以降はもはや何一つとして進歩はないと言えるだろう。もし進歩を望むなら、後退が必要である。すなわち石を水に捨てなければならない。すると石に何かが起こる。石の命が再び蘇るとき、石はさらに強力になり、より研ぎすまされる。それは驚嘆すべきことである。七度もそれをする者がいる。七度を越えると非常に危険であり、呪いの中に転落することもあり得る。私は三度行ったが、正直なところ四度目を行うつもりはない。三度とも結局うまくいったとはいえ、多くを失う危険は冒したくない。余りにも痛ましいことである。たとえばアジアの中央高原で石を水に投げ捨てた三度目のとき、私は心の中でつぶやいた。「石を再構築するために幾世紀もかけて、どれほど苦闘してきたことか。ああ悩ましい。ああ惜しいことだ」。本当に苦しみ抜いたあげく、今ようやく賢者の石は再び蘇りつつある。1978年には蘇るであろう。石を再構築するためにアーリア根人種の全歴史を費やした。それゆえ、それは大変痛ましい、とても苦しい過程である。

石をさらに研ぎすまし、より強力にすることを望むアデプトたちがいる。彼らは転落（墮落）するのではなく、故意に降りる。そう、降りるのである。どのようにして降りるのか。それは禁じられているときに妻をめとるのである。しかし射精することなく、グルの指導の下でアルカーノ A. Z. F. のすべての原則に従って働くのである。そのとき石を失う。しばらくしてもう一度石に命を与え、大作業を行う。そのとき石はずっと強力なものになる。

転落と下降の違いを明らかにしなければならない。私は降りたのではな

く、わざと転落した。私の場合は三度とも転落したのであり、降りたのではない。アジアの中央高原でザノーニ伯爵と同じ過ちを犯して妻を持った。それは禁じられていたにもかかわらず、私はそれを行った。幾世紀にもわたる経験の後、このようにして大作業が実現するのである。

フェニックス（不死鳥）を思い出してみよう。フェニックスは不思議な鳥である。金の冠をいただき、その足はとても美しい純金ですっかり覆われている。自然はフェニックスに敬意を払っていた。数え切れない歳月の後、フェニックスは生きることに倦怠を感じて、香木、ミルラ、ナルド、その他の貴重な枝から巣を作る決意をした。そしてその真相は、自ら焼死してしまったのである。自然はいつもこのようであるが、その後フェニックスは自分自身の灰の中からさらに力を増して蘇った。このようにして、大作業はなされなければならない。なぜなら投げ捨てた石は水に沈んだままだからである。

クリストが勝利するまで

〔質問〕 尊敬すべきマスター。モーゼの杖のことですが、それは蛇に変わりましたね（『出エジプト記』7:8~12）。どういうことでしょうか？

〔回答〕 ちょうどモーゼが杖を蛇に変えたように、我々も杖を蛇に変えなければならない。またモーゼが蛇を杖の上に掛けると（『民数記』21:6-9、『ヨハネ福音書』3:14）、蛇が杖自体に変わったように、我々も自分に自分自身の中で杖を持ち上げる必要がある。杖の子はインティモ・クリストである。我々自身の中でインティモ・クリストを上げなければならない。それは、本質的存在の高次的顕現体を創造することを意味している。ここで我々はそれをすべて生きなければならない。インティモ・クリストを具現することによって、クリストは到来し、この世で生きるのである。そして迫害され、人々の中で成長し、ありとあらゆる誘惑に耐え忍ぶ。なんと骨の折れることだろうか。クリストは我々の意志、マインド、感情、性に関する過程、およびあらゆる種類の機能を引き受けなければならない。クリストは一人の人間となる。なぜならすべての闇を打ち破り、「我」を

除去し、本質的についに勝利するからである。キリストは完全な栄光に値し、主は救世主である。それゆえにキリストは完全な誉れに値する。キリストの前で、二十四人の長老（深遠な内なる本質的存在の二十四の部分）と四人の聖人（四大要素と関係する、本質的存在の四つの高次の部分）はみな、子羊の足もとに彼らの冠を投げ出す。なぜならキリストこそ、唯一、栄光と誉れを受けるに値するものだからである（『ヨハネの黙示録』第4章）。そしてキリストの血は火である。キリストは不死の子羊であり、人の中で生き、死ぬことはない。完全に不死である。キリストは普通のありふれた人間となり、誘惑、欲望、思考、すべてと闘う。キリストが勝利するまで、誰も彼を認めることはない。そのために、こう言われる。「世の罪を取り除く神の子羊」と。（『ヨハネ福音書』1:29）

これが、十分に解釈された秘教的ノスティック・キリスト教である。それゆえキリストは救世主であり、我々を救う。火で我々をあがなう。なぜならキリスト自身は、顕現するために容器としてアラバスター（雪花石膏）の杯を必要とする火の魂だからである。その容器とは、創造しなければならない純金の体である。

このことを理解することはすばらしいことである。なぜなら、我々が何をすべきかを知ることになるからである。つまり、太陽人間、真実の人間、キリスト人間に変身しなければならないことを。従って、一切のものに対して、あらゆる人々に対して、死ぬまで闘い抜かなければならない。自分自身に対して、自然に対して、前進を阻むすべてのものに対して勝利するまで闘い抜くのである。そう、勝利するまで。そして太陽人間に、キリスト人間になるまで。

これは進化の問題ではなく、また退化の問題でもない。奥深いところの内的な革命の問題である。進化と退化の教義、その教義から脱しており、大作業に属するものである。そのために革命的である。

〔質問〕 マスター・サマエル、それは意志次第なのですか？

〔回答〕 もちろん、意志にかかっている。誕生は意志であり、全人生を大

作業に捧げなければならない。太陽人間になること、それを達成するまでである。太陽はそれを望んでいる。太陽人間の収穫を望んでいる。太陽はそのことに関心があり、だからこそ我々は太陽人間になるまで、太陽に協力しなければならない。太陽は、太陽人間の刈り入れを願っており、そのことに興味がある。

* * *

内的体の創造

【リビドー】 精神分析学の用語。語源はラテン語Libido「愛欲」。フロイトによれば、人間の行動の元となる性欲、およびその満足を求める性的エネルギー。ユングは広く生命的、精神的エネルギーとした。

アルケー

【アルケー】 ギリシア語で「起源」「始め」の意。古代ギリシア哲学では万物の根源（アルケー）が探究された。例えばタレスはアルケーを「水」とし、その弟子アナクシマンドロスとアナクシメネスはそれぞれ「無限なるもの」「空気」とした。またヘラクレイトスは「火」と考えた。

【下にあるものは上にあるものと同じである】 古代エジプトのマスター、ヘルメス・トリスメギストスが残したエメラルド・タブレットの一節。

【マテリア・プリマ】 錬金術の作業の発端に置かれている素材で、ここから賢者の石に向けての物質変成の過程が始まる。

乾燥水銀と砒素硫黄の除去

【クンダリティグアドール器官】 クンダバファー。「印象の変換」ができないとき、地球にエネルギーを放つ。神聖委員会の委員長、大天使サカキによってレムリア根人種に付与されたが、人間の意識を眠らせ、余りにも有害だったので後に天使ロイソスによって切断された。しかし邪悪な原子が彼らの体内に残り、「我」の原因となった。（『ノーシス秘教辞書』）

三段階の純化

【鉄と火による三段階の純化（浄化）】 第一段階では、初めに秘教的分野で集中的に働かなければならない。第二段階では、月、水星、金星、太陽、火星、木星、土星、天王星、海王星の九つの領域で働き、すべてのエゴを除去しなければならない。第三段階では、エゴの記憶とエゴの種子を除き、イスカリオテのユダのイニシエーション、苦難のヨブの八年を通過しなければならない。なお鉄による浄化とは、苦しみ、試練のこと。（『ノーシス秘教辞書』）

二重の重心

【ハナスムッセン】 Hanasmussen。四種類ある。①肉体を持つだけの人。死後、エッセンス（魂）をびん詰にした悪魔の軍団のみが残る。②創造したアストラル体を持つが停滞したまま死ぬ人。ワークをやめて黒魔術に堕ちる。新しい生まれ変わりでワークを続けなければ、必然的に退化する。③高次の

体をつくったが、エゴをまだ除去していない人。エゴを除去しなければ、すぐ後の生まれ変わりにおいて、彼らもゆつくりと退化する。④転落した神々。同様にエゴを除去する決心をしなければ、再び退化しなければならない。

（『ノーシス秘教辞書』）

【アンドラメレック】 『神聖魔術秘教コース』第5章、『列王記第二』17:31参照。

証（あかし）

【ティフェレット・イニシエーション】 「第一の山」の、八段階あるヴィーナス（金星）のイニシエーションの第二段階に相当。ニルヴァーナを放棄しダイレクト（直線）の道を選んだイニシエイトが、生命体の光のクンダリーニを上昇させたときに受ける。ヨルダン川でのイエスの洗礼によって象徴され、このとき Kristus が誕生する。『ロゴス・マントラ・テウルヒア』第一章「金星のイニシエーションでの体験」参照。

【地球連鎖】 神智学によれば太陽系には十の進化系があり、例えばその一つ、地球系には七連鎖、七環、七天体、七根人種、七枝人種が存在する。ちなみに現在は第四連鎖、第四環期、地球天体期、第五根人種（アーリア根人種）の時代である。ここでは現在の地球連鎖（第四連鎖）より前の「宇宙の昼」、すなわち月連鎖（第三連鎖）のこと。月はかつてもっと大きな天体の最後の残骸であり、ちょうど現在の地球が第四連鎖で占めているのと同じポジションを第三連鎖で占めていた。

【禅定菩薩】 『実践魔術マニュアル』第四章参照。

フェニックス

【呪いの中に転落する】 七度を越えるとカルマになる。キリストは七度行い、ヘルメスは三度行った。超人ヘルメスは、文字どおりヘルメス・トリスメギストス（「三倍偉大なヘルメス」の意）である。

【転落（caida 墮落）と下降（bajada）の違い】 転落とは、射精をして石を失うこと。意識は眠ってしまう。下降の場合は射精せず、従って意識は目覚めたままでエゴはない。